

## 『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

——西教寺探訪第二回研究報告——

戸松憲千代

## 目次

- (一) は し が き
- (二) 千觀内供の傳記
  - (A) 千觀の誕生とその人となり
  - (B) 箕面隱棲の原因及年時
  - (C) 箕面時代の千觀
  - (D) 千觀の示寂
- (三) 千觀内供の書畫
  - (A) 極樂國彌陀和讃
  - (イ) 眞阿僧都の上梓本
  - (ロ) 本書の作者考
  - (ハ) 本書の原形
  - (ニ) 本書の内容一斑
  - (B) 八箇條起請
- (四) 十願發心記の梗概
  - (イ) 本書の名稱
  - (ロ) 本書の古寫本
  - (ハ) 本書の體裁及流傳
  - (ニ) 本書の製作年時
- (五) 十願發心記の梗概
  - (A) 述 意
  - (B) 釋 文
  - (C) 斷 簡
  - (五) 千觀に於ける淨土教學の特異性
  - (A) 十 念 論
  - (B) 彌陀一佛(土)論
  - (C) 安養都率優劣論
  - (D) 極樂報應論
  - (六) 結 論

## (一) はしき

昭和十三年三月一日、坂本西教寺に正教藏文庫を訪れ、平安朝時代に於ける未傳稀覯の淨土教典籍十數部の存することを發見した。仍つて同文庫の司書辻氏の御好意に依り、それ等の全部を寫し取つてこれが整理を急いだのであるが、こゝに漸く一通りの研究を了へ起稿するの運びにまで漕ぎつけたのである。何れこれに關する全體的研究は稿を改め發表したいと思つてゐるが、今は取り敢へずその中の一篇を抄出し、坂本探訪第二回の研究報告として本稿を草したる次第である。

## (二) 千觀内供の傳記

### (A) 千觀の誕生とその人となり

千觀内供は俗姓橘氏、相州刺史利貞の子にして、黃門侍郎公賴は彼の祖父である。醍醐天皇の延喜十八年(一説に延喜十九年)<sup>②</sup>に呱呱の聲をあけたのであるが、初め父母その子なきを憂ひて千手觀音を祈り、夢に蓮華一莖を得と見て彼を生んだと云ふ。彼の名はその千手觀音に因み、それを略して千觀と呼んだものであるらしい。弱齡にして三井の園城寺に入り、第十一世の長吏運昭に師事して顯密の兩教を兼學した。その修學振りは實に熱誠そのものゝ如く、食事と大小便利の時を除く外は書案を去らなかつたと傳へられてゐる。また彼は性慈順にして會つて面に悲色なかりしと云はれてゐるが、これは後世彼が時人に依つて笑佛と崇められ『扶桑隱逸傳』、或は觀音の化身と尊ばれた『發心集』<sup>①</sup>こ

と、併せ考へ、その人となり、を惟ふべきであらう。

(B) 箕面隱棲の原因及年時

かくて智(學問)と德(慈悲)と兩つながらを兼ね備へた千觀は、教界にも重きをなし、朝廷の御おほえも厚くあつた。或は公請に應じて經釋を講じ、或は御齋會に出席して導師を勤めるなど、諸傳に多く記るされてゐるところである。然しながら、かゝる名聲や榮譽、それは世間を出離せる眞の出家者に取つて如何なる必要を持つものであらうか。一日彼は空也に遇ひ、「身を捨てゝこそ」との教誨を蒙つた。これは内供千觀に取つて正に青天の霹靂とも云ふべく、大いに内省せしめらるゝところがあつたらしい。こゝに彼は一切の名利を捨て、永年住みなれし園城寺を出で、遠く箕面(或は箕尾とも書く)の僻地に引退したのである。

しかしながら、この箕面隱棲に就いてはなほ一つの理由があつた。それは園城寺の地が日觀に不便であつたと云ふことである。彼は『觀經』を依憑とし、日觀を重じたのであるが、これは當時淨土教界の一般的傾向であつた。いやしくも淨土を願生せるものは總べて此の日觀を實踐したのである。されば彼が園城寺を出で、箕面に引退したのは、眞摯なる淨土教實踐者としての彼として寧ろ當然のことであつたであらう。『元亨釋書』等には、この間の消息を左の如く實寫してゐる。

初觀止ニ三井ニ勞修ニ淨土。園城之背西峰巍峩不便ニ日觀ニ、乃遠覓ニ勝地ニ至ニ攝州ニ、有ニ山出ニ金色雲。觀思ニ靈區ニ而トレ居。今之金龍寺也。

而して、この箕面隱棲の年時は勿論詳かでないが、『寺門傳記補錄』の

安和三年二月二十六日投<sup>シテ</sup>拜<sup>シテ</sup>行譽律師<sup>ヲ</sup>入<sup>リ</sup>壇受<sup>ス</sup>三職<sup>ニ</sup>于<sup>テ</sup>千光院<sup>ニ</sup>。智興同後移<sup>シテ</sup>居<sup>リ</sup>攝州金龍寺<sup>ニ</sup>、專修<sup>ス</sup>安養淨業<sup>ヲ</sup>。呼號<sup>シテ</sup>攝州先德<sup>ト</sup>。

とある記事に徴すると、安和三年（一六三〇）、即ち彼の五十三歳以後と見ねばならない。然しながら、この記事は明かに誤謬であつて、即ち『扶桑略記』に

應和二年壬戌四月、千觀内供於<sup>テ</sup>攝州養尾山觀音院<sup>ニ</sup>作<sup>ル</sup>法華三昧宗相對抄<sup>ヲ</sup>。

とあり、また『元享釋書』等に

應和二年夏旱、朝議勅<sup>シテ</sup>觀祈<sup>ニ</sup>雨<sup>ヲ</sup>。觀時居<sup>ニ</sup>攝州箕面山<sup>ニ</sup>、撰<sup>ブ</sup>法華三宗相對釋文<sup>ヲ</sup>。（下略）

とあるに依れば、少くとも此の應和二年（一六二二）、すなはち彼の四十五歳には箕面に隱棲してゐたことが分る。況んや、今回新發見にかゝる現存千觀の『十願發心記』には

于<sup>（年イ）</sup>時應和二歳仲春。略述<sup>シテ</sup>其意<sup>ヲ</sup>、貽<sup>フ</sup>之後輩<sup>ニ</sup>。日本國天台沙門釋千觀於<sup>テ</sup>攝津州箕面山觀音院<sup>ニ</sup>記<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。

右の如き奥書があつて、従つて此の應和二年說（嚴密にはそれ以前）は何人と雖も否定し得ざるところであらう。

### （C）箕面時代の千觀

爾來、千觀は一意著作に専心したのであつて、その二十餘部の述作の如き殆んど此の時代に成れるものである。而して此等の述作が當時の學界に與へた影響は實に甚大で、『元享釋書』等には「觀多抄<sup>ク</sup>台宗奥旨<sup>ヲ</sup>。方今三井堅義學者取<sup>ル</sup>則焉<sup>ヲ</sup>。」とさへ記るされてゐる。また彼の『極樂和讃』の如き、特に一般人士の喝采を博したものの如く、これに依つて西方極樂に結縁し、彌陀の淨土を願生するに至つたものは、その數を知らずと傳へられてゐる。

加之、彼はこの時代に於いて數多の逸話を遺してゐる。何れも當時の彼の姿を髣髴たらしむるものであるから、左にその三四を紹介しておかう。

①千觀は一日夢にやむごとなき人が現れて「汝は道心深ければ極樂に往生することは間違ひない。また汝は善根無量であるから、彌勒下生の曉を期せんこと必定である」と云ふを聞いて夢さめ、涙を流して喜んだ。

②應和二年の夏『法華三宗相對文』を執筆中、勅に依つて旱天に雨を降らし、歡慮を安ぜしめた。

③千觀はその晩年、しばしば淀の河邊に出で、自ら馬夫となつて道行く人々に布施をした。

④權中納言敦忠卿の第一女が、或る時千觀に向つて「師命終の時は妾にその生處を示したまへ」と約束をした。後千觀死して幾もなく、彼女は千觀が蓮華の船に乗つて、口に自ら作るところの『極樂和讃』を唱へつゝ、西行するのを夢みた。

⑤千觀の入滅一年前、八月十五夜の満月の晩であつた。微妙なる音樂に混つて空中に聲があつた。千觀問つて云ふ、「我を迎へ給ふか」と。空中に答へて云く、「今夜は他人を迎ふ。明年の今夜必ず汝を迎へん」と。この「空中の聲」とは正しく四十八願の筏聲にして、千觀はその聲にたがはず翌年八月十五日に示寂した。

⑥一條院の御時である。一日御齋會のみぎり、千觀は義照院と同宿した。そのとき義照院は千觀を普賢菩薩と夢みて感涙に咽んだ。

しかしながら、こゝに吾人の注目すべきは此等の逸話がすべて此の箕面隱棲時代に屬するものばかりであると云ふことである。これ、何等か意味するところのものがあるのではなからうか。思ふに一人物に就いて、その人の逸事が

或る特定の一時期に限られてあると云ふことは、その一時期がその人の生涯に於いて最もゆたかな、うるばいのあるものであることを意味するものではなからうか。特に千觀の場合、それが彼の高位高官の時代に存せずして、却つて無位無官の隠棲時代にあると云ふことは、そこに吾人をして大いに考へせしむるものがあるではないであらうか。

### (D) 千觀の示寂

かくて、千觀は圓融天皇の永觀元年(一説に永觀二年)<sup>③</sup>、手には自ら造るところの願文をにぎり、口には彌陀の寶號を唱へつゝ、その六十六歳の生涯に最後の幕を閉ぢたのである。詳しくは諸傳<sup>④</sup>に就いて見られたし。

### (三) 千觀内供の著書

千觀の著書二十餘部の中に於いて、先づその一般的著書より一言するならば、それは已に『扶桑略記』や『元亨釋書』等の諸傳が指摘してゐる如く、三井の堅義學者の規範となり、當時の學界に對しては絶對的權威を持つものであつたらしい。しかし、これ等の大半は散逸して、今日吾人の眼にし得るものは――寡聞なる私の知るかぎり――左の如き九部に過ぎないのである。

- |                  |               |
|------------------|---------------|
| ① 妙法蓮華經二十八品頌(一卷) | ② 卽身成佛義私記(一卷) |
| ③ 法華三宗相對抄(三八卷)   | ④ 十六算義科目錄     |
| ⑤ 十六算所依(一六卷)     | ⑥ 十如是義私記(一卷)  |
| ⑦ 十妙義私記(一卷)      | ⑧ 十二因緣義私記(一卷) |

『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

## ⑨ 三周義私記(一卷)

次に、彼の淨土教典籍に就いては、『長西錄』等の諸錄に

## (A) 極樂國彌陀和讃(二十餘行)

## (B) 八箇條起請(一卷)

## (C) 十願發心記(一卷)

右の如き三部を記載してゐる。これ等は已に保胤(一六五七)の『日本往生極樂記』にも

作<sup>ル</sup>阿彌陀和讃<sup>ヲ</sup>廿餘行。都鄙老少以爲<sup>テ</sup>口實<sup>ニ</sup>。極樂結縁者往々而多<sup>シ</sup>。(乃至)以<sup>テ</sup>八事<sup>ヲ</sup>而誠<sup>ニ</sup>徒衆<sup>ニ</sup>、發<sup>シテ</sup>二十願<sup>ニ</sup>而導<sup>ク</sup>群生<sup>ヲ</sup>。

と記るし、また隆國(一六六四)の『今昔物語集』にも

亦阿彌陀<sup>ノ</sup>和讃<sup>ヲ</sup>を造る事廿餘行也。京田舎の老少貴賤の僧、此の讃を見て興じ翫で常に誦する間に、皆極樂淨土の結縁と成ぬ。(乃至)而る間、千觀八事<sup>ノ</sup>の起請を造る。此れ僧の行として可<sup>レ</sup>翔き事と誠る故也。亦十の願を發して衆生を利益せむが故也。

等と述べてゐるところで、千觀の述作として間違ひなきものである。いづれも今日新に發見せられ、その全貌を窺ひ得ることは、實に吾人の欣快に堪へざるところである。以下この三部に就いて、その大體を解説するであらう。

## (A) 極樂國彌陀和讃

① 眞阿僧都の上梓本。本書は略して「極樂和讃」「極樂讃」、或は「阿彌陀如來和讃」「阿彌陀和讃」「彌陀和讃」と

呼ばれ、近くは『國文東方佛教叢書』(第八)、『日本歌謠集成』(第四)、『先德法語集』(卷下)、『釋教歌詠全集』(第五)等に載せられてゐる。然るに、伊勢西來寺眞阿僧都(二四四六)の上梓本(天保四年秋上梓)に依ると、その奥書に

右和讃一首和歌七十二首トハノ津國金龍寺緣起ニ所載也スル。往年詣デテ彼寺ヲ抄スレヲシ。

とあつて、もと千觀の所住たりし攝津の『金龍寺緣起』に所載されてゐたことが知らるゝのである。今それに依ると

① ゆかばやな「娑婆の界の西の方」よろづの人のねがふ極樂

② まよはじな「十萬億の國すぎて」いたるところは彌陀の極樂

③ もとめつる「淨土はありつ極樂界」われらがつひのすみかなりけり

④ ごくらくに「佛はゐます彌陀尊」ひとをむかふるちかひたがふな (以下略)

大體右の如き形式を以て、一首五七七七七の和歌六十八首を示し、これに「四弘誓願⑦の歌」四首を加へてゐる。しかるに、その文體極めて拙劣にして、後の千觀の「四弘誓願歌」に比し巧拙に於いて餘りにも大差がある。「四弘誓願歌」は和歌としてかなり整つたものであるが、この六十八首は唯だ語数を都合せるに過ぎず、文學的價值は皆無と云つてよい。但しその中七言五言の一聯のものゝみを取つて今樣歌として見るときは、他の部分の平俗的口調たるに反し、佛教の述語も多く用ひられ、その語調も極めて高くなるやうである。されば、この點先輩も已に注意して、七五一聯の句のみを取つて(「内を指す」)、これを以て千觀の眞作とし、他はすべて後人の添加と見做してゐるのである。⑧

⑤ 本書の作者考。かくて私は、現存の『極樂和讃』(七五一聯の六十八句)は千觀の眞作として肯定したのである。然し、この七五一聯の六十八句に就いても、なほその眞作説を疑つてゐるものが多い。近くは志田義秀氏の如きがそれである。

即ち氏はその著『増訂梁塵秘抄』附録に於いて

今傳へる極樂國彌陀和讃が、往生極樂記に「彌陀和讃二十餘行」と云つて居る其のものであるかは頗る疑問で、  
(中略) 何れにしても千觀の眞作と云ふ確定は更に無いのである。

と述べてゐられる。勿論私も現存の『極樂讃』がそのまゝ述作當時のまゝなるか否かに就いては疑を持つものであるが、  
(後項の「本書の原形」の條下参照)、その大體に於いて眞作説を支持するものである。仍つて以下、現存『極樂讃』が千觀の眞作なることを、千觀の述作として確實なる「十願發心記」と比較することに依つて、内容的に之を證明して見たいと思ふ。  
これに就いて先づ注目すべきは

十惡五逆謗法等極重最下の罪人も一たび南無と唱ふれば引接さだめて疑はず

一日二日の眞心に彌陀の御名をし唱ふれば大悲の誓あやまたす九品蓮臺さだまれり

とある二首の和讃である。何れも稱名の來迎、稱名の往生を詠つたものであるが、これは『十願發心記』の第一願に

臨終之時身心安樂、蒙彼彌陀來迎、往生上品蓮臺。(中略) 普令下法界一切衆生、臨命終之時七日以前預知、  
時至、心離顛倒、心住正念、遇善知識教、稱十念、身心無諸苦痛、同生彌陀淨土。

と云ふものと、全く内容筆格を一にしてゐるのである。また『極樂讃』に

淨土十方おほけれど極樂われら縁ふかし佛三世に在せど彌陀は我等に契あり

とある一首は、その初二句に十方佛國中極樂淨土の我等に縁深きことを述べ、後の二句に三世の諸佛中彌陀一佛の我等に契り厚きことを歌つたものである。然るにこれは『十願發心記』に、先づ

問、淨土有<sup>リ</sup>十方<sup>ニ</sup>、何故<sup>ゾ</sup>必<sup>シ</sup>令<sup>シムルヤ</sup>一切衆生<sup>ヲ</sup>悉<sup>ク</sup>生<sup>ゼ</sup>一佛<sup>ニ</sup>（彌陀、淨土<sup>ニ</sup>）。

と發問して、（一）闇浮の衆生は心濁亂なれば、（二）一佛即一切佛、一淨土即一切淨土なればの二義を以て答へるものと、次に

問、諸佛既<sup>ニ</sup>多<sup>シ</sup>、何必<sup>ゾ</sup>念<sup>シモゼンヤ</sup>彌陀<sup>ヲ</sup>一耶。

と問つて、（一）諸經多く彌陀を讃するが故に、（二）彌陀四十八願を以て衆生を引接したまふが故に、（三）彌陀佛と此の界の衆生と偏へに因縁あるが故にの三義を以て答ふるものと、全くその内容を合致せしめてゐるのである。かくて文と云ひ義と云ひ、かくまでその符節を合する以上、現存の『極樂和讃』は恐らく千觀の眞作と見て誤りないであらう。

④ 本書の原形。しかるに、こゝに問題となることは『極樂記』等が此の極樂和讃を指して「和讃廿餘行」と云へるに對し、現存のそれが六十八句を止め、兩者の間に相異點の存すると云ふことである。これは一體、如何に融會さるべきものであらうか。これに就き、先輩は種々工風を拂ひ、色々と論じてゐるのであるが、大體左の如き五説を見るこゝが出来るやうである。

① 高野博士説。一行は二句より成るものとして、『極樂記』に「廿餘行」とあるは卅餘行の誤りと見る説。

（『日本歌謠史』）

② 大矢博士説。一行は四句より成るものとし、所々脫落せるものと見る説。（『音圖及手習詞歌考』）

③ 志田義秀氏説。一行四句より成るとし、『極樂記』の「廿餘行」を十餘行の誤りと見る説。

（増訂『梁塵秘抄』附錄「梁塵秘抄の本文に就いて」）

『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

④ 多屋賴俊氏說。一行を大體三句より成ると見て、「廿餘行」を現存のまゝに成立せしむる說。『和讀史概説』

⑤ 高瀬承嚴氏說。四句一章と見て、これに「四弘誓願の歌」四首を加へて「廿餘行」を成立せしむる說。

『佛書解說字典』

〔備考〕 右五說の中、①③④は『極樂記』に「廿餘行」と云ふ行を「章」或は「首」と同義に解し、①と④は一行、二行の行（くだり）の意に解するものゝやうである。

何れも一理あつて傾聴に値ひするものであるが、なほ不滿な點がないでもない。『極樂記』は千觀の滅後三年乃至四年に出來たもので、而もその著者保胤（一六五七）は大體千觀（一五七八）と同期の人物であるから、この「和讀廿餘行」と云へる記事は眞をおいて可いものである。況んや、その後平安末期の『今昔物語集』や『扶桑略記』『元享釋書』等が總べて此の「廿餘行」說を支持してゐるに於いては、一概にこれを否定し得ないのである。されば①高野③志田兩氏の如く「廿餘行」を「卅餘行」、或は「十餘行」に改竄することは、吾人の從ひ兼ねるところである。

この點、④多屋⑤高瀬兩氏の說は確に一步を進めてゐる。しかし此れとて難點はある。多屋教授の如く行を「くだり」の義に解して、一行三句より成ると見るときは——已に多屋氏も指示してゐらるゝ如く——一行の字數が三十六字、漢字を交へても三十餘となり、餘りにも多きに過ぎる難がある。平安朝時代の古寫本を見るに、かくの如き多くの字數を持つたものを會つて見たことがない。況んや千觀の現存古寫本に於いて、『十願發心記』にしても『卽身成佛義私記』『法華三宗相對抄』にしても、一としてかゝるものゝ存せざるに於いてをやである。加之、多屋氏は此の『極樂讚』が全體で何首あつたかに就いては一言も觸れてゐられない。「現存のまゝにて加減すべきでない」とは云つてゐられるが、それが一首で何句を止むるものなるかは更に言及してゐられない。氏の云はるゝ如く、この『極樂和讚』が現

存のまゝのものであるとするならば、それは意義上より見て四句一首のもの、或は二句、三句、或はそれ以上で一首をなすもの等、色々な形態の和讃があつたと見做さねばならぬが、——多屋氏にもさう云ふ意向があるやうに見受けらるゝ——一大文豪たりし千觀ともあらうものが、一『極樂和讃』に於いて此の如き種々なる形態の、不體裁極まるものを構想する筈はなからうと思ふ。それは必ずや四句一首のものか、或は二句、三句、或は四句以上で一首をなすものかの、何れか一つに統制せられ、體系づけられてあらねばならぬであらう。否な一步退いて、千觀にかくの如き種々なる形態の和讃があつたとしても、現存のまゝにては意味の不通なるものが非常に多い。現存の『極樂和讃』に於いては、誰れが見ても四句一首のものが最多數を占めてゐるのであるが、この四句一首のものが和讃として完全なる形態を整へ、意味もよく通じ、語調も非常に高いのに對し、他の二句一首、三句一首、或はそれ以上の五句、六句で一首をなす如きものは、文體は勿論、語調も低くて、意味も通ぜず、和讃として不完全極まるものばかりである。

そこで、私は一往③大矢博士の云はるゝ如く、行は「首」或は「章」の意に解して、而も此の『極樂和讃』の原形は元來四句一首のものであつて、現存のものには所々脱落があると見たいのである。この四句一首と見る見方は、已に②志田⑤高瀬の兩氏も依用してゐらるゝのであるが、兩氏の如くは現存のまゝを認定して次第の如く四句一首、都合十七首を立つるのであつて、これでは大矢博士も指摘してゐらるゝ如く、意味の纏り難きものが少からず存することゝなるのである。故に、私は大矢氏の如く四句一首と云ふことに根據をおいて、その意味の纏まれるものは原形を止むるも、纏り難きものは脱落せるものと斷じたいのである。而して、その脱落の様相は大體次の如くである。

# ① 娑婆さかひの界かいの西の方

十萬億じふまんいっぴくの國くにすぎて

淨土はありつ極樂界

佛はるます彌陀尊

② 七重行樹かけ清く

八功德水池すみて

苦空無我の波唱へ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

③ 常樂我淨の風吹きて

天の音樂雲にうつ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

④ 金の沙地にしきて

晝夜六時に迎へつゝ

寶の蓮雨ふりて

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

⑤ 孔雀鸚鵡聲々に

妙法門をとふれば

衆生聞くものおのづから

佛法僧を念ずなり

(以下略)

しかし私は、大矢氏のかゝる見方が勿論完全を得たものとは惟はない。が然し、かく見て行くことは他の如何なる見方よりも、意味も能く通じ、文の體裁も好くて、『極樂和讃』の原形に最も近いものがあるやうに思ふものである。

また、此の大矢氏の説にしても、なほ多少の疑點がないではない。何となれば、大矢氏の如くば此の和讃は廿行(二十首)となつて、『極樂記』の「廿餘行」と矛盾することになるからである。しかし、これに對する解答は極めて簡單である。已に現存の和讃は脱落があつて完全なるものではなかつた。それは永い間、多くの民衆に依つて口稱されてゐる間に、語句にも多少の變化を來し、脱落も相當あらうと想像さるゝものである。<sup>⑩</sup>而もその脱落は一首(四句)の中の一部のところもあらうが、一首(四句)全體ながら脱落したものも亦あらう。果して然らば、大矢氏の「廿行」は廿行

に止まるものでなく、一首或はそれ以上の和讃が此れに加へらるべきであつて、『極樂記』の「廿餘行」と何等矛盾することがないのである。また私は、この廿首に「四弘誓願の歌」四首を加へて「廿餘行」を成立せしむることを考へて見た。千觀はその著『十願發心記』の中に「菩薩皆有二種大願。一是惣願、所謂四弘誓願云々」と述べて、已に四弘誓願の肝要なることを論じてゐるのであるから、この考方も強ちに否定すべきでないであらう。然し今の私としては、上述の「脫落説」を支持したのである。

③ 本書の内容一斑。現存の『極樂和讃』は已に不完本に屬して、従つてその全體的意味は把握し難いが、大略の意味はこれにて充分窺ひ得る。即ち一言にして云へば、淨土の三經に基いて阿彌陀佛と其淨土とを巧みに讃詠したものである。先づ『阿彌陀經』の意に依り極樂の莊嚴を讃嘆し、次に『大經』に據つてその淨土を建立し給ひし阿彌陀佛の光壽二徳とその殊勝の四十八大願をたゞへ、最後に『觀經』に準じてかゝる彌陀佛の在す極樂淨土に、五逆十惡の我等が一聲の稱名に依つて必ず往生し得ることを綴つてゐるのである。これが大體本書の中心思想をなすものであるが、本書には更に人身受けがたく佛法遇ひがたければ、早く浮世の榮譽を捨て、淨土を欣求すべしと述べ、而も我等如き惡人を救ひ給ふものは彌陀の本願とその彌陀の本願を勸説し給ふ釋尊の説教なれば、この二尊を共に歸命し頂禮せねばならぬと結んでゐるのである。言簡なれど意味深く、而もその詞章の美麗典雅なることを見るべきであらう。

### (B) 八箇條起請

本書は「八誠」「八事」「八誓」「八制」「座右銘」「八事の起請」「千觀尊者八制」「千觀内供八箇條起請」等の種々なる呼稱を持つてゐる。永く流傳を絶つてゐたのであるが、先年山口光圓教授に依つて大原の如來藏に發見せられた。<sup>①</sup>西教

寺の正教藏文庫にも「雜々ニ番箱」の箱書に「千觀内供八箇條起請」とあつて、曾つて本書の藏せられてゐたことを知るのであるが、惜しむらくは今は存しない。如來藏所藏本には

千觀尊者八制

- 一、自<sup>ラ</sup>病患<sup>ハ</sup>之外<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>闕<sup>ク</sup>例時勤<sup>ニ</sup>
- 一、念誦讀經<sup>ノ</sup>中不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>交<sup>ユ</sup>世俗言論<sup>ニ</sup>
- 一、常守<sup>ニ</sup>身口意<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>談<sup>ゼ</sup>他<sup>ノ</sup>好惡長短<sup>ヲ</sup>
- 一、於<sup>テ</sup>無益言論<sup>ニ</sup>縱得<sup>ニ</sup>其理<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>諍論<sup>ス</sup>
- 一、於<sup>テ</sup>親友同行<sup>ニ</sup>一事已上<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>内外隔<sup>ツ</sup>
- 一、往生極樂之外永可<sup>レ</sup>絶<sup>ニ</sup>世俗悖望<sup>ヲ</sup>
- 一、於<sup>テ</sup>修學事<sup>ニ</sup>雖<sup>モ</sup>非<sup>ニ</sup>其器<sup>ノ</sup>致<sup>ニ</sup>慙慙<sup>ニ</sup>必成就<sup>ス</sup>
- 一、繫<sup>ケ</sup>心如來禁戒<sup>ニ</sup>常愧<sup>ニ</sup>我罪業<sup>ヲ</sup>
- 一、若違<sup>ニ</sup>此八事<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>地獄人<sup>ニ</sup>
- 一、若順<sup>ニ</sup>此八誠<sup>ニ</sup>當<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>淨土人<sup>ニ</sup>

とあつて、以て彼の性格及びその淨土教宣揚のための熱心さを偲ぶことが出来るであらう。

(C) 十願發心記

① 本書の名稱。本書にも「十願」(『極樂記』等)「十大願」(『諸宗章疏錄』)「十大願記」(『安養抄』)「往生十大願」(『長西錄』)

「十願發心記」(『天台霞標』等)の如き多くの名稱がある。何れも同本の異名と見るべきであるが、古來往々にして之れを忘れ、實に滑稽千萬なる誤謬に陥つてゐるものがある。一例を云ふと、近く『山家祖德撰述篇目錄』(佛全二・p. 273)の如きがそれで、『十大願』と『十願發心記』とを全然別物の如くに取扱つてゐる。然しこれは明かに謬見であつて、それは此の『十願發心記』を良慶の『安養抄』所引の『十大願記』、或は良忠の『要集記』(淨全十五・p. 200)所引の『十大願』等に對照せしむることに依つて首肯さることである。良慶は曾つて園城寺の長吏たりし人、平安末期の人物にして、その著『安養抄』(大正八四・p. 178b)には「十大願記云千觀撰」等と、本書を「十大願記」の名を以て呼んでゐる。

言二十念者、入息出息合爲一念、或五箇入息出息合

爲一念。此十念間歸心彌陀、口唱名號也。或稱

南無阿彌陀佛、經此六字之頃名爲一念。然彌勒問

經云、乃至(『安養抄』所引『十大願記』)

言二十念、入息出息合爲一念、或五箇入息出息合爲一念。此十念間歸心彌陀、口唱名號也。或稱南無阿彌陀佛、經此六字之頃名爲一念。然彌勒問經云、(以下略)(現存『十願發心記』二十紙左)

かくて兩書は全く相合致するのであつて、その同本異名なることが知らるゝと同時に、今回私の發見にかゝる現存『十願發心記』の千觀の述作として間違ひなきことも認知さるゝのである。(良忠の『要集記』との對照は煩を恐れ略す)

⑩ 本書の古寫本。本書の古寫本に就いては曾つて論じたことがあるが、私の知るかぎり西教寺の正教藏文庫と叡

山文庫とにそれゝ一本を藏してゐる。そして此等は、昨年三月眞宗學研究室的藤原幸章君の手を患し之れを書寫して對校したことであるが、今此等の二本を一瞥するに、文字の出沒異同が多少あり、また西教寺本が左に掲ぐる如き跋文を有するに對し、叡山文庫本は全く之れを存しない。しかし、その紙質及び筆格より見て後者は明かに時代を新

しうし、而もその體裁、訓點等の齊しきこと等より見て、叡山文庫本は西教寺本よりの轉寫ではないかと思はるゝのである。

此御記文<sup>ハハノコロ</sup>玄比金龍寺<sup>ノ</sup>定乘房<sup>ノ</sup>願珍所持之本。先德御自作。謹<sup>シテ</sup>以<sup>テ</sup>拜覺之誠<sup>ニ</sup>、深厚之大願<sup>ニ</sup>盡<sup>シ</sup>有情界<sup>ヲ</sup>、無邊之大悲<sup>ニ</sup>弱<sup>ム</sup>法界際<sup>ニ</sup>。信心<sup>ヲ</sup>徹<sup>テ</sup>肝腑<sup>ニ</sup>、渴仰<sup>ス</sup>催<sup>ニ</sup>感涙<sup>ヲ</sup>。仍<sup>ニ</sup>面<sup>ニ</sup>則<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>右御本<sup>ヲ</sup>書<sup>ス</sup>寫<sup>ス</sup>之。嗚呼、進<sup>シテ</sup>雖<sup>モ</sup>悲<sup>ニ</sup>三有苦海之沈淪<sup>ヲ</sup>、退<sup>イブ</sup>喜<sup>レ</sup>係<sup>ニ</sup>十種願網之一目<sup>ニ</sup>。仰願者本願尊靈深垂<sup>ニ</sup>加<sup>ヘ</sup>悲惑<sup>ヲ</sup>、安養都率往詣無<sup>ク</sup>滯引導<sup>シ</sup>給<sup>ハ</sup>。

于<sup>レ</sup>時延德三年辛亥極月三日以<sup>テ</sup>硯水<sup>ヲ</sup>染<sup>メ</sup>禿筆<sup>ヲ</sup>、拭<sup>フテ</sup>暗眼<sup>ヲ</sup>摸<sup>スル</sup>明文<sup>ヲ</sup>而已。

遮那院止觀結緣勤息豪憲滿六十

御本無點之間、讀者拜見<sup>スルニキ</sup>可<sup>ク</sup>闕<sup>ク</sup>其益<sup>ヲ</sup>歟。仍<sup>テ</sup>乍<sup>ラ</sup>恐私加<sup>ニ</sup>朱墨之點<sup>ヲ</sup>記<sup>ス</sup>愚昧之管見<sup>ヲ</sup>、定<sup>シテ</sup>速<sup>ニ</sup>背聖意<sup>ニ</sup>歟。有<sup>リ</sup>恐<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>憚<sup>リ</sup>、庶幾<sup>コイカガハクバ</sup>後賢可<sup>キ</sup>被<sup>ル</sup>加<sup>ヘ</sup>添削<sup>ヲ</sup>而已<sup>ミ</sup>。

十願項別有<sup>レ</sup>之

豪憲重<sup>ネテ</sup>記<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>

明應四年初春之比<sup>コロテ</sup>以<sup>テ</sup>右御本<sup>ヲ</sup>純承<sup>ニ</sup>現金剛法印豪政<sup>ニ</sup>。  
同六年丁乙二月二十四日以<sup>テ</sup>右本<sup>ヲ</sup>書寫<sup>シ</sup>畢、奉讀<sup>シ</sup>畢。

豪主

右者以<sup>テ</sup>寶園院本<sup>ヲ</sup>令<sup>ムル</sup>書<sup>セ</sup>寫<sup>セ</sup>之<sup>ヲ</sup>者也

明曆參丁酉歲八月吉日

江州栗太郡芦浦觀音寺舜興藏

仍つて以下西教寺本を中心として、その體裁、流傳等に就いて一言するであらう。

④ 本書の體裁及流傳。本書は和綴一冊、縦九寸一分横六寸七分、表紙及び跋文を合せて四十六紙よりなる。一紙二十二行、一行約十四字を止め、その書體は楷書にして、概して鮮明である。まゝ蟲食あるも、叡山文庫本に依つて之れを補ふことが出来る。而して、もと無點本であつたらしいが、延徳三年（二一五二）豪憲なるものに依つて加點せられ、吾人をして閲讀に便ならしめてゐる。

而して、その流傳關係は上掲の跋文に明かなる如く、文玄<sup>⑬</sup>の頃賴珍所持のものが、延徳年間（二四九—二一五二）豪憲の手に歸し、更に明應四年（二一五五）豪政より豪主に繼承せられ、それを明曆三年（二三一七）八月江州芦浦の觀音寺舜興なるものが書寫したるものである。

⑤ 本書の製作年時。次に本書の製作年時に就いて一言するならば、西教寺本、叡山文庫本ともに

于<sup>レ</sup>時應和二歲仲春<sup>（年イ）</sup>。略述<sup>シテノベノヲ</sup>其意<sup>ノリス</sup>、貽<sup>コレヲ</sup>之後輩<sup>コウハイニ</sup>。日本國天台沙門釋千觀<sup>（津イナシ）</sup>於<sup>テ</sup>攝津州箕面山觀音院<sup>ニ</sup>記<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。

右の如き奥書を持つてゐるのであつて、應和二年（一六二二）、すなはち彼の四十五歳の時の述作であつたことが知らる。彼は此の年『法華三宗相對抄』（三十八卷）をも著してゐるのであつて、以て彼が此の時代如何に著作生活に盡瘁してゐたかゞ窺はるゝのである。

## (四) 『十願發心記』の梗概

本書は開卷第一に

欲<sup>スルニセント</sup>釋<sup>ニ</sup>十大願之趣<sup>ヲ</sup>略<sup>シアリ</sup>有三意<sup>ニ</sup>。一者述<sup>シ</sup>意<sup>ヲ</sup>、二者釋<sup>シ</sup>文<sup>ヲ</sup>、三者斷簡<sup>ナリ</sup>。

とあつて、述意、釋文、斷簡の三門より成立つてゐる。

## (A) 述 意

先づ述意とは讀んで字の如く、意を述することである。千觀が十大願を發せるその意趣に就いて述べたものである。何故に發心發願は必要であるか、それは衆生に對して如何なる意義を持つものであらうか、さう云つたことに就いて述べたものである。而して此れに左の如き九問答がある。順を追ふてそのあらましを述ぶるであらう。

○ 第一問答。十界の衆生は稟性各異なれば、發心して佛果を成ずるものもあれば、然らざるものもあるであらう。従つて必ずしも發心するの必要なしと云ふ疑難に對して、彼は飽迄「五乘齊入」の天台教義に立脚して、一切衆生は煩惱の力に依つて暫く相を異にするも、その本具の佛性はもとより一なるものなれば、同じく發心して佛果を求むべきであると『仁王經』を證左として之れに答へてゐる。

○ 第二問答。然しこれにはなほ説明が要る。何となれば、『瑜伽論』に依れば「五乘各別」の義を立て、獨り菩薩乘及び不定乘のみに成佛の義を許して、人天乘<sup>(これを無性有情と名く)</sup>聲聞緣覺乘<sup>(これを決定性二乗と名く)</sup>等には成佛の理なしと論じてゐるからである。然し『瑜伽論』は方等部の經典を釋したものである。方等經は所謂藏通別圓の四教を並べ説き、なほ三乘方

便の教を帶するものである。所釋の經すでに方便を帶ぶ、能釋の論如何が方便を帶ばざらんやである。一切衆生皆成佛道とは法華圓教の立場より云ふのである。この圓教の立場より云ふ時は、煩惱即菩提、生死即涅槃と圓融相即せられ、一切皆成佛すべき義をもつ。永滅を語る權方便の『瑜伽論』を以て、法華開會の眞實經を難すべきでない。

③ 第三問答。若し佛性一なるが故に佛界に歸すと云はゞ、端拱無爲にして成佛の期を待つべく、發心修行して身心を勤勞するの必要はないであらう。この疑難に對しては、彼は木火の喩を出し、木には火となるべき自性はあるも、燐鑽の縁に遇はざれば火の起ることはない。衆生の佛性正に然りで、たとひ佛性ありと雖も、發心修行の縁なければ發ることはないのであると釋明してゐる。

④ 第四問答。果して然らば、布施等の諸餘の萬行を修して可いでないか。必ずしも發願するの必要はないであらう。思ふに、願は行を決定するものである。願力を用ふることに依つて行は行たり得る。恰も牛力の荷車を挽くに必ず御者を必要とするが如くである。發願なき行は如何なる行と雖も、佛果を成ずることは不可能である。

⑤ 第五問答。而してその發心の時期に就いて此の人間界(今生)こそ發心のために絶好のチャンスなることを述べ、  
⑥ 第六問答。次に發心すべき機類に就いて、小乗の發心は出家に限るも、今この十願は大乘菩薩の大願なれば、出家も在家も容易に發願し得べしと説いてゐる。

⑦ 第七問答。然し、かゝる十願は今生(人間界)に於いて、而も我等如き凡夫が、果して成就し得るのであらうか。蓋し、この十願は今生に於いて凡夫地のまゝにて果遂すると云ふものではない。今生に於いて先づ發願し、順次生に於いて地位に登つて之れを成就するのである、故に在家のものと雖も容易なるものである。

⑧ 第八問答。たとひ未來世に於いて此の十願を遂ぐると云ふも、かゝる大乘菩薩の大願はもと吾人の愛好し得ざるところのものである。何となれば菩薩行と云ふものは、諸人來つて或は手足を乞ひ、或は骨髓頭目を乞ひ、或は國城妻子を乞ふも、その乞ふところに従つて之れを與へねばならぬと云ふ。かゝる難行苦行は我等の堪へ得ざるところであるからだ。寧ろ小乗の心を發して、かゝる苦行のなからんことを望むものである。

思ふに、これ菩薩の苦行を恐れて敢へて發心せざるものである。然らば他の惡業の力に依つて三塗に墮して極大苦を受くるであらう。菩薩の苦行は、その源慈悲心より出づるものなれば、苦行にして苦行でない。たとひ他のために身を割截すると云ふも大悲心に薰じ、般若相を亡じて、身心ともに一分の苦相も感ずることなきものである。苦行しつゝ却つて樂を感ず、これが菩薩の行願である。故に佛も「寧ろ闍提の心を發すとも二乗の心を發すことなかれ」と呵責したまふのである。

⑨ 第九問答。大乘菩薩の大願は千萬人の中一二も成就するものなしと云ふ。況んや我等如き薄地の凡夫がたとひ發心しても、能く之れを遂げ得るであらうか。思ふに、菩提の成不成は最初の發願の有無に決定さるゝ。恰も初陣破るれば後陣も自然に破るゝ如く、發心あればやがて佛果は成就するものである。現身に之れを遂げ得ずとするも、立願の力に依つて遙かに菩提の因を結び、永く獄門の薪を免るゝものである。一生は過ぎやすい、今の時に發願せずんば、またいつの時かあらんやである。

かくて、千觀は此の「逆意」の一門に於いて發願の必要性を強調してゐるのであるが、最後に

方今日景頻<sup>ニ</sup>頤<sup>テ</sup>、年光空移<sup>ル</sup>。一生半<sup>カバ</sup>過遺命不<sup>ナ</sup>幾<sup>ナ</sup>。佛教難<sup>ク</sup>遇<sup>ヒ</sup>、人身希有<sup>ナリ</sup>。若空過<sup>シ</sup>ニ<sup>シク</sup>此生<sup>ギナ</sup>者定後悔不<sup>レ</sup>可<sup>ラ</sup>及<sup>ヅ</sup>。努

力努力、コイネガハクバレ庶勿失<sup>レ</sup>時<sup>ヲ</sup>。夫出家是先哲之跡、而人多不堪<sup>タヘ</sup>。隱遁、又古賢之風、遂者猶少<sup>ホシ</sup>。至于此發願<sup>ニ</sup>者誰人不<sup>カシヤ</sup>堪<sup>タヘ</sup>之哉。發願大意略在<sup>レ</sup>此焉。

と結んでゐる。その道心の如何に深かりしかを偲ぶことが出来よう。

## (B) 釋 文

この一科に於いて千觀は十大願の一々を列舉し、それに詳細なる註釋を施してゐるのである。而して彼の云ふところに従へば、凡そ菩薩の願には二種があつて、一は總願、二は別願である。かの四弘誓願、五大願等はその前者に屬し、樂師の十二大願、彌陀の四十八願等は後者に屬す。今の十大願は勿論後者の別願であると。果して然らば、その十大願とは如何なる内容のものであらうか。

### ○第一願。

今生普<sup>ユクサゲテ</sup>搜<sup>ニ</sup>一代之教<sup>ヲ</sup>、具<sup>サニリ</sup>知<sup>ニ</sup>如來權實道<sup>ヲ</sup>、念<sup>ニ</sup>々漸淨<sup>ニ</sup>六根罪垢<sup>ヲ</sup>、現身必緣<sup>ニ</sup>障外之境<sup>ヲ</sup>、臨終之時身心安樂<sup>ニシテ</sup>蒙<sup>ニ</sup>彼彌陀來迎<sup>ヲ</sup>、往生<sup>ニ</sup>上品蓮臺<sup>ニ</sup>。豈<sup>ニ</sup>營我一人獨有<sup>ニ</sup>此事<sup>ニ</sup>乎。普<sup>ククメシ</sup>令<sup>下</sup>法界一切衆生<sup>ヲ</sup>、臨<sup>ニ</sup>命終<sup>ニ</sup>之時七日以前<sup>ニ</sup>預<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>時<sup>キ</sup>至<sup>ルコトヲ</sup>、心離<sup>ニ</sup>顛倒<sup>ヲ</sup>、心住<sup>ニ</sup>正念<sup>ニ</sup>、遇<sup>アヒ</sup>善知識教<sup>ヲ</sup>、稱<sup>ニ</sup>十念<sup>ヲ</sup>身心無<sup>ク</sup>諸苦痛<sup>ヲ</sup>、同生<sup>ニ</sup>彌陀淨土<sup>ニ</sup>。

この第一願に就いて、千觀はその一文一語に註解を施してゐるが就中左の五項が注意せしめらるゝ。

① 凡そ行は教より起り、證は行によつて成する。故に菩薩の大行事を起さんと欲するものは、權實の二道を辨別して、以て佛教の正意を認識せねばならない（その實踐法は天台の「五時」の「八教」の判釋を知るにあり）。故に此の願を發すのである。

② また、人の正に死せんとするや必ず三愛を生ずるものである。その三愛とは、云く境界愛、自體愛、當生愛。こ

の三愛に苦しめられ念佛すること能はず、故に此の願を發してその安適を要期するのである。

③ 人生れてその死期を知らず。故に欲心堅牢にして、菩提の心を發することがない。故に此の願を發して、預め無常の期を知らしめ、發心の媒介<sup>なやだち</sup>たらしむるのである。

④ また、たとひその終期を知ると雖も、善友に遇はざれば發心するに由ない。故に又この願を立つるのである。

⑤ また善友の教を聞くと雖も、重苦に逼まらるゝ時は發心することが出来ない。故に身心の苦痛を離れて念佛の善根を全うすべく、此の願を發するのである。

## 第二願。

願<sup>クハレ</sup> 我<sup>レ</sup>往<sup>ニ</sup>生<sup>シテ</sup>淨<sup>ニ</sup>土<sup>ニ</sup>後<sup>ニ</sup>速<sup>ニ</sup>還<sup>ニ</sup>娑<sup>カニ</sup>婆<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>本<sup>ニ</sup>願<sup>力</sup>先<sup>ニ</sup>度<sup>ニ</sup>有<sup>緣</sup>衆<sup>生</sup>、弘<sup>ムル</sup>以<sup>ニ</sup>釋<sup>尊</sup>遺<sup>法</sup>、將<sup>ニ</sup>繼<sup>ニ</sup>慈<sup>尊</sup>出<sup>世</sup>、於<sup>ニ</sup>彼<sup>會</sup>之<sup>中</sup>最初<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>菩<sup>提</sup>記<sup>ヲ</sup>。豈<sup>ユ</sup>只<sup>ガ</sup>此<sup>ノ</sup>一<sup>期</sup>事<sup>哉</sup>。惣<sup>ニ</sup>釋<sup>尊</sup>十<sup>方</sup>世<sup>界</sup>成<sup>佛</sup>處<sup>盡</sup>未<sup>來</sup>際<sup>窮</sup>法<sup>界</sup>際<sup>、</sup>皆<sup>ニ</sup>弘<sup>ニ</sup>其<sup>教</sup>法<sup>繼</sup>後<sup>佛</sup>出<sup>世</sup>。

第二願に就いては次の二項が注意せらるゝ。

① 「度有緣衆生」とは、緣に順緣、逆緣、親緣、疎緣等の多種がある。いま順緣は菩薩の善友なれば之れを度することは當然なるも、逆緣は菩薩に怨<sup>あ</sup>離<sup>だ</sup>をなすものなれば、之れを度するとは如何なものであらうか。思ふに、世間の賢者にしてなほ仇を報するに徳を以てする。況んや菩薩の大悲は諸の怨敵に於いて二想なきものである。拔濟の悲、これ平等なるものである。此の願の立意、けだし茲にあり。

② 釋尊の滅して慈尊の出でたまふ、この間五十六億七千萬歳である。この時に當り、前佛の教法は漸く滅盡し、後佛のそれは未だ興出しない。人甯より甯に入り、世迷より迷に入る。故に此の大願を發して、釋尊の遺法を弘めて、

その恩を報ぜんと思ふのである。

③ 第三願。

十方世界諸佛出世一々承仕シテ无ニ空過クガルコト〔者〕。我身皆在ニ佛前ニ常ニ獻ニ廣大無盡供養雲海ニ常爲ニ對揚ノ士ト爲メ利益衆生ニ難シ問如來ニ常爲ニ發起衆ト方決ニ衆會機々之疑ヲ常承ニ佛神力ヲ隨ニ佛將轉ニ法輪ヲ。

これには次の二項が注意せらるゝ。

① 『金剛經』を見ると「我れ无量阿僧祇劫の昔、八百四千萬那由他の諸佛に値ふて供養し承仕した」と説いてある。してみると、諸佛に値遇することは前佛の遺跡、供養承仕することは菩薩の恒規である。故に今この願を發するのである。

② 久成の諸佛菩薩は互に師弟となつて一佛の化を助け給ふのである。故に今も此の大願を立てゝ、佛に隨つて常に法輪を轉ぜんと欲ふのである。

④ 第四願。

十方世界諸佛滅後我身皆在ニ其國ニ弘メ正法ヲ令メレニ於佛在世ニ弘メ其像法ヲ令メレニ等ニ正法ニ弘メ其末法ヲ令メレニ等ニ像法ニ遂不レ令ニ教法ヲ滅セ方繼ニ後佛出世ニ。

正像末の三法に就き説明し、衆生の機に隨つてその住世不同なるも、暫く釋尊の如くば正法千年、像法千年、末法一萬年なりと論じてゐる。

⑤ 第五願。

『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

十方恒沙、无佛世界我皆往、其中、揭ニ佛敎之燈、照ニ愚暗衆生、拔ニ邪見之荊、令入ニ正見中。无佛世界とは敎行證の三法ともになき世界である。邪見盛んに起つて三寶の名なければ無佛世界と云ふのである。たとひ佛の滅後なりとも、若し敎法あればなほ有佛世界と云はねばならぬと。實に巧釋である。

### ⑥ 第六願。

十方世界三災劫中我能往、其中、以ニ長者身、救ニ其飢渴之苦、現ニ大醫王身、療ニ其疫疾之苦、以ニ慈善根力、除ニ刀兵之禍、非ニ營三災劫能作ニ此化、普於ニ雜染界、同救ニ其苦、亦復如是。凡厥弘誓本願、一如ニ藥師如來。三災劫に就いて、大の三災と小の三災あることを述べ、その各々の説明を施して、今の三災劫とはその後者に屬すべきことを論じてゐる。

### ⑦ 第七願。

十方世界三惡道中、我能往、其中、以ニ大悲力、代ニ諸衆生、受ニ種種之苦、以ニ神通力、能救ニ彼種々之苦、以ニ智慧力、皆令入ニ一乘。豈、當於ニ三惡道、能作ニ此化哉。救ニ人天及三乘之苦、亦復如是。大悲、威神、愍、同ニ地藏尊。諸の大悲の菩薩は、すべて我が所修の善根功德の果を自に受けずして他に受けしめ、他の所造の惡業の報は他をして受けしめず自に受くるものである。傳敎大師が三際所修の一切功德を己身に受けず、これを有識に施して皆な菩提を得せしめんと願ひしが如き即ちこれである。故に今も此の大願を發するのである。

### ⑧ 第八願。

我无始生死已來、乃至菩提道場、父母・六親・朋友・知識・奴婢・僕從、愍我所經歴來、十方世界一切衆生、若聞ニ

我名<sup>ガナ</sup>、見<sup>ミ</sup>我身<sup>ガナ</sup>、讚<sup>ホメ</sup>我<sup>ナ</sup>、毀<sup>ソシ</sup>我<sup>ナ</sup>、凡<sup>ソノ</sup>彼見聞觸知一切衆生、我皆拔濟引接盡令<sup>レ</sup>生<sup>ニ</sup>我成佛國<sup>ニ</sup>。其弘誓本願淨土莊嚴、皆如<sup>ニ</sup>彌陀極樂世界<sup>ニ</sup>。

### ⑨ 第九願。

十方世界一切衆生發<sup>ニ</sup>大乘心<sup>ノ</sup>者、修<sup>セン</sup>大乘行者、證<sup>セン</sup>大乘菩提者、乃至世出世間一切善事、我皆爲<sup>ニ</sup>不請友<sup>ノ</sup>必令<sup>ニ</sup>其事究竟<sup>ニ</sup>。威神勢力如<sup>ニ</sup>彼文殊師利<sup>ニ</sup>。

### ⑩ 第十願。

凡<sup>ソノ</sup>盡虛空法界一切有情、我皆不離<sup>レ</sup>其身<sup>ヲ</sup>、常居<sup>ニ</sup>一處<sup>ニ</sup>、隨<sup>テ</sup>彼機機無邊之類<sup>ヒ</sup>方垂<sup>ニ</sup>種々<sup>ノ</sup>冥顯之應<sup>ヲ</sup>、常以<sup>ニ</sup>如來之教<sup>ヲ</sup>引<sup>ニ</sup>導其心<sup>ヲ</sup>、次<sup>ニ</sup>遂令<sup>ニ</sup>究竟一乘之道<sup>ヲ</sup>、乃至如是盡<sup>ニ</sup>衆生界<sup>ヲ</sup>。若衆生界不<sup>レ</sup>盡我亦不<sup>レ</sup>取<sup>ニ</sup>正覺<sup>ヲ</sup>。大悲闍提如<sup>ニ</sup>觀世音<sup>ニ</sup>。

〔附記〕 第八、九、十の三願にも勿論語句の解釋は見らるゝが、特に注目すべき事柄はないやうである。

要之に、千觀の十大願は淨土の三經を有力なる資材とし、彌陀の四十八願等を參考として、彼獨有の十願を建立したものである。何れも大乘菩薩の本願として適しかるべく、吾人に示唆を與ふること又大なるものがあらう。

### (C) 斷 簡

斷簡とは簡び定むること、即ち料簡と大體同義の語である。右の十願に對する疑難に就いて問答料簡することである。而して、それに十二個の問答があるが、その大要は左の如くである。

① 第一問答。第一願に「現身必緣<sup>ニ</sup>障外之境<sup>ヲ</sup>」とあるが、この「緣障外之境」とは『普賢觀經』に準するに六根清淨の人を云ふのである。それは天台圖教の六即位に當つれば、第四の相似即に當り、即ち内凡十信位のものを指すので

『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

ある。然るに、かの天台大師の如き人すらなほ、五品位(觀行即、外凡の位)に止つて、此の六根淨(十信位)には達することが出来なかつたのである。況んや我等如き未來世の凡夫が、而も現身にかゝる高位を證得することは、これ望み得べからざることではなからうか。

この疑難を斷簡して、彼は誓願は現身を期すと雖も、その證得は人の根性に從つて必ずしも一定しないと論じてゐる。かの南岳(惠思禪師)が現身に銅輪(十住)を期して六根淨(十信)に止つた如き、また天台(智顗)が現身に六根淨を期して五品位に止つた如き皆なこれである。耆屈魔羅は重罪の惡人なれども現身に羅漢の果を得、周利般豆はまた鈍根の人なれども一偈の下に漏盡の身を感じた。佛世のこと不思議なりと雖も、衆生の機根も亦不思議である。されば我が身を謙ふて、此の願を發すに躊躇してゐてはならぬのである。

② 第二問答。 また第一願に「往生上品蓮臺」とある往生の義に就いて、菩薩は大悲を以て業となし、誓ひ利生にあるべきである。たゞ三界に生じて苦の衆生を救ふべく、極樂に往生してその身を安することを願ふべきでない。この疑難に對し、『十疑論』及び『智度論』に據つて、菩薩に二種がある。一は久修の菩薩、二は初心の菩薩である。久修の菩薩は已に忍力あれば此の難は當るけれども、初心の菩薩は忍力更になく、未だ衆生を救ふに堪へざるものである。かゝる菩薩は先づ淨土に往生して佛に近き、法忍を得て後三界に生じて衆生の苦を抜くことが出来るのである。今此の第一願は此の初心の菩薩の爲にあるのであつて、かゝる故に淨土往生を願するのである。と之れを巧みに斷簡してゐる。

③ 第三問答。 第二願に「願我往生淨土後速還娑婆、以本願力先度有緣衆生云々」とある。菩薩の大悲は平

等にして、その弘誓は普齊なるものである。故に十方に往いて衆生を度すべく、獨り娑婆界に還つて有縁のみを利益すべきでないであらう。これに對する千觀の解答は簡單である。勿論菩薩の大悲は平等にして隔てなきものであるが、有縁を以て先とするものである。我等は此の娑婆界に於いて初めて發心し、その父母・師長・檀那・童僕等の善友に依つて今極樂に往生を得るのである。故に此の娑婆界に還つて有縁を度することは、即ちその恩德を報ずると云ふものである。

④ 第四問答。正法千年像法千年末法一萬年とは已に佛記に決定し給ふところで、大方の菩薩と雖も之れを延縮することは出来ないのである。然るに今此の第二願に釋尊の教法をして盡未來際まで弘めんと云ふは、これ佛の金言に違背するものにあらざるか。思ふに、菩薩はその悲願を立つるに、まゝ法相の理にかゝはらざることがある。一例を云ふと、「自作の業、他受の報」と云ふことは因果の法則に背くものである。然るに菩薩は自らの善根の果報は他に受けしめ、他の惡業の果報は自らに受けんことを願ふ。然し、これは菩薩自らの慈心を述べたものであつて、敢へて差支へなきことである。

⑤ 第五問答。この第二願にも釋尊の遺法をして慈尊の出世に繼がしめんと云ひ、また第四願にも同様のことを願じてゐる。何故に釋尊の遺法のみを弘通して、諸佛のそれが弘通を願じないのであるか。蓋し、一切諸佛の功德は等しと雖も、その恩に於いては親疎がある。今釋尊は我等が發心の師にして、恩近く徳親しきものである。諸佛は然らず、恩疎く徳遠きものである。故に重ねてかゝる願を立てたのである。

⑥ 第六問答。第二願の如く慈尊の三會に遇ふて最初の受記を得んと願するならば、即ち都率に生ずることを求む

べく、然るに今何故に彌陀の極樂に往生することを願するのであるか。この疑難に對し、千觀は次の如く斷簡してゐる。

都率には内院と外院とがあるが、その内院は十善を持つて毀犯せざるもの、往生し得るところである。故に我等如き破戒の徒の到底希望し得ざるところである。その外院は我等も往生し得るが、退轉することあれば、また我等の樂ふべからざるところであると。更に彼は『十疑論』の二義を證左とし、安養の都率に優る、ことを論じてゐるが、詳しくは後章に譲るであらう（〔四〕（C）「安養都率優劣論」の項参照）。

⑦ 第七問答。正像末の三法の差別を立つことは金口の誠言より出でて、嚴然犯すべからざるものである。然るに今第四願の如く正法をして佛の在世に同じからしめ、像法をして正法に、末法をして像法にそれ〴〵同じからしめば、正像末の差別は破れ、佛記に違することになるではないか。蓋し、正像末の三法をして皆な佛世に等しからしめんと云はゞ、三法無差別の科もあらう。然し、この第四願は正法をして佛の在世に等しからしめ、乃至末法をして像法に等しからしめんと云ふのであるから、更に三法無差別の難はないのである。而も此の願に正法を佛世に等しからしめんと云ふも、それは正法を佛世にすると云ふことではない。正法の中に佛世の如くその法をして一味ならしめんと云ふのである。像法をして正法に等しからしめんと云ふも、像法を正法にすると云ふことではない。像法の中に正法の如く證者あらしめんと云ふのである。末法をして像法に等しからしめんと云ふも亦同様である。末法の中に像法の如く行人あらしめんと云ふのみである。故に何等正像末三法差別の滅することはないのである。

⑧ 第八問答。若し然らば、唯だ正像の二法のみあつて、末法の義を闕くことになるではないか。しかし、この願

に等しと云ふは全同を意味するものではない。一例を云ふと諸善の人を指して佛に等しと云ふが如くである。善人と佛とが全同であると云ふのではない。誓願の力に依つて、一分行證の人をあらしめようと云ふのである。像法を正法に相似せしめ、末法を像法に相似せしめようと云ふのである。像法を以て全く正法となし、末法を以て全く正法となすと云ふのではない。故に佛記に違するの過失はないであらう。

⑨ 第九問答。第七願の如く衆生の惡業を菩薩が代つてその苦を受くると云はゞ、因果の道理に背き自他雜亂の過があるではないか。此の疑難に對する千觀の解答は簡單である、諸經に多く、定力・通力・願力・法の威徳力と云ふことを述べてゐる。ところが誓願を立つるものは、その願力に依つて此等の諸徳が自然に備はるのであつて、決して法相の理を破壊することはないのである。實に痛快なる論理である。

⑩ 第十問答。第八願に見聞觸知の衆生に於いて善縁を結び淨土に往生せしむとあるが、然らば見聞觸知せざる衆生は永く化縁に預からざることとなり、それでは菩薩の大悲に隔りがあることになるではないか。思ふに、此の第八願の意は我が身を虚空遍法界の一切衆生の前に現じて、無邊の機類に應じて諸の縁を結ばんと願せるものである。處として現ぜざるなく、機として縁ぜざることなきものである。故に事實上、見聞觸知の衆生のみあつて、見聞觸知せざる衆生は一人もないことになる。されば見聞觸知の衆生に善縁を結ぶと云ふことは、見聞觸知せざるの衆生を縁ぜずと云ふことにはならぬのである。

⑪ 第十一問答。若し此の如く一切の衆生に皆な善縁を結ぶと云はゞ、一切衆生は皆な往生し成佛して、生界(衆生)は存せざることとなるが云何。これに對し千觀は、日月の喩を以て論じてゐる。日月の光は一切の人民を照す、然る

に之れを見ざるは盲者の過にして、日月の過ではない。今もその如く、菩薩の大悲は周ねけれども、敢へて之れを隔つるは衆生の過である。故に衆生は永遠に存して生界は無盡であると。

⑤ 第十二問答。第四、第五の願は同じく興法にあり、第六、第七の願は同じく拔苦にあり、第八、第九の兩願は同じく結縁にある。然るに今此等を各分して發願せるは如何なる譯けであるか。之れに對して千觀は、先づ「答、凡十種、大願皆有<sup>ナリ</sup>由來<sup>ナリ</sup>」と十願に説示の次第あることを論じて、大體左の如きことを述べてゐる。

自分は此の身に菩提心を發して佛法を興隆したいと思ふのであるが、微力の能く成し得ざるところである。故に先づ彌陀の願力に乗じて九品の蓮臺を期するのであつて、初願を立つるの理由<sup>ナリ</sup>すなはちこゝにあるのである（第一願）。然るに此の佛法は縁に依つて起るものである。縁なきところに興隆佛法と云ふことはない。故に自分は先づ縁の最も近き娑婆の有縁を度し、これに釋尊の遺法を弘通しようと思ふのである。これ第二願の存する理由である（第二願）。而して此の有縁を度するには法を以てせねばならぬ。然るに法は佛に依つて轉ぜらるゝものなれば、自分は佛に親近して對揚士となり發起衆となつて法を宣揚したいと思ふ。故に第三の願が必要である（第三願）。かくて法の持つ意味は重大である。法滅すれば惑生じ、惑生すれば業起り、業起れば苦の絶ゆることがない。故に自分は法を住持して、法の絶ゆることをなからしめたいと思ふのである。故に第四願を建立するのである（第四願）。像末の世には顛倒が多い。況んや無佛の世に於いておやである。故に自分は此の無佛の世に法の燈をかゝけねばならぬ。第五願を立つる理由はこゝにある（第五願）。興法は利生を本とし、利生は拔苦を先きとするものである。故に自分は先づ人間の重苦を救ひ、更に之れを三途にまで及ぼしたいと願ふのである。第六、第七の兩願はこゝに理由がある（第六願、第七願）。拔

苦の裏には必ず與樂がなければならぬ。故に自分は第八願に此の與樂を誓つたのである(第八願)。然るに樂の究竟は涅槃の果である。然るに果は行に依つて成じ、行は發心に依つて決定さるゝ。故に第九の願があるのである(第九願)。諸佛の道は邊際なしと雖も、而も方便を以てその究竟となすものである。故に最後の第十願が存するのである(第十願)。かくて『十願發心記』はその終を告ぐるのであるが、最後にその奥書の文に就いて一言せねばならない。即ちその一節に云く

我今立<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>十願<sup>ヲ</sup>遙結<sup>ニ</sup>菩提<sup>ノ</sup>之因<sup>ヲ</sup>。若臨<sup>ニ</sup>命終<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>此願文<sup>ヲ</sup>握<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>右掌<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>終<sup>ニ</sup>其命<sup>ヲ</sup>。願命終後、順次生中此誓願之書變成<sup>ニ</sup>如意珠<sup>ト</sup>、生々世々、在々處々我右掌中常有<sup>ニ</sup>此寶珠<sup>ヲ</sup>矣。依<sup>ニ</sup>此寶珠<sup>ノ</sup>之力<sup>ニ</sup>普爲<sup>ニ</sup>一切衆生<sup>ノ</sup>能作<sup>ニ</sup>無邊種々<sup>ノ</sup>佛事<sup>ヲ</sup>、若爲<sup>ニ</sup>貧乏<sup>ノ</sup>者隨<sup>ニ</sup>樂方雨<sup>ニ</sup>種々寶<sup>ヲ</sup>(中略)仰願、十方三世諸佛菩薩賢聖弟子天龍八部護世神等且垂<sup>ニ</sup>證明<sup>ヲ</sup>且加<sup>ニ</sup>神力<sup>ヲ</sup>除<sup>ニ</sup>諸質碍<sup>ノ</sup>之因緣<sup>ヲ</sup>令<sup>ニ</sup>我遂<sup>ニ</sup>此大願<sup>ヲ</sup>。

と。これは『極樂記』や『扶桑略記』等が

發<sup>シテ</sup>十願<sup>ヲ</sup>而導<sup>ニ</sup>群生<sup>ヲ</sup>遷化之時手握<sup>ニ</sup>願文<sup>ヲ</sup>口唱<sup>ニ</sup>佛號<sup>ヲ</sup>。

と云ひ、また

閻梨以<sup>ニ</sup>八事<sup>ヲ</sup>而誠<sup>ニ</sup>徒衆<sup>ヲ</sup>發<sup>シテ</sup>十願<sup>ヲ</sup>而導<sup>ニ</sup>群生<sup>ヲ</sup>遷化之時手握<sup>ニ</sup>願文<sup>ヲ</sup>口唱<sup>ニ</sup>佛號<sup>ヲ</sup>。

と述ぶるところと符節を合し、即ち彼が此の十願を果遂すべく如何に熱烈であつたか、偲ばれ、而もその十願たるや決して彼れ自らのみ止まらず、やがて利他のためにもあつたことが窺はるのである。加之、右の奥書に依つて彼の道心が如何に深かりしかも偲ばれ、慕しく感ぜらるゝことである。

## (五) 千觀に於ける淨土教學の特異性

千觀の淨土教はその『極樂讚』に就いて見ても、或は『八箇條起請』『十願發心記』等に就いて見ても、往生淨土の思想を一般民衆に普及せしむることに目的をおいて、従つてその思想は飽迄平易簡明を旨としたものである。故にその當然の歸結として、彼特有の獨創説に乏しく、特異性を缺いてゐるの嫌ひがあるのである。然し此の特異性の乏しいと云ふことが却つて彼の特異性で、そこにこそ彼の學説の特色が見らるゝのである。若し彼の淨土教にして、難解極まる學説にして、冷き理論にのみ走るものであつたならば如何。それは學的に論理的には面白きものがあらうが、一般大衆への普及と云ふことに對しては何等の意義を持つものであらうか。思ふに淨土教本來の使命は理論にはあらずして、實踐にあらねばならぬ。果して然らば、獨創性、特異性に乏しき彼の學説こそ、却つて淨土教本來の眞面目を發揮したものと云はねばならぬであらう。かゝる意味に於いて、彼の淨土教學は本邦淨土教史上特筆大書さるべき意味を持つものである。

然し、彼の教學にも全然獨創説がないのではない。左に紹介するであらう如き二三の問題が即ちそれで、吾人の注目に値するものである。

## (A) 十念論

千觀は『觀經』下々品の「具足十念」に就いて

當レ知、此念堅論ニ其時ニ經ニ於十念、横論ニ其事ニ則具ニ終等ニ。

と述べ、即ち横豎の二義を立て、豎(時間)に就けば十念を経る間を云ひ、横(空間)に就けば慈等の十念を指すと論じてゐる。然るに、その豎に約するものに就いて、更に三義があるものゝ如く、第一は入息出息を合して一念と云ひ、第二は五個の入息出息を合して一念となし、第三は南無阿彌陀佛と六字を稱する間を一念とするものである。かくて十念は時間に解釋せられ、即ち一念の十倍の時間を指して云ふのであるが、此の場合『觀經』の「具足十念稱南無阿彌陀佛」とは此の十念を経る間、心を彌陀に歸し、口に名號を唱ふること、なるのである。『十願發心記』には之れを左の如く記述してゐる。

言ニ十念(者)、入息出息合爲ニ一念、或五箇入息出息合爲ニ一念。此十念間歸ニ心彌陀、口唱ニ名號也。或稱ニ南無阿彌陀佛、經ニ此六字之頃、名爲ニ一念。

次に慈等の十念であるが、これはその第十念に「正念に佛を觀じて諸相を除去す」とある語より見ても、明かに觀念に約したものである。『元亨釋書』等に依ると、その昔彼が『觀經』を依憑とし、日觀を重じることが指摘せられてゐる。また當時學界の一般的思潮より考へても、千觀の上にかゝる十念を觀念意念に解釋すべき素地の存したであらうことは、之れを忖度するに難くないのである。

しかし臨終に際して、心の羸弱になれるものが、かくの如き十念を果して能く成し得るであらうか。思ふに、かゝる十念は専心の稱名に自然に具足するものである。それは一々別々に緣ぜらるべきものでもなければ、また一つ一を數へて十念となすものでもない。恰も受戒の場合、三歸を唱ふると、別に離殺等の戒を緣ぜざれども、それが自然に具足してあるが如くである。故に吾人にして専心に稱名をはけむならば、かゝる十念が自然に具足して、若しは一稱

若しは多稱すべて極樂淨土に往生することが出来るのである。かの『極樂讚』に<sup>(14)</sup>

十惡五逆謗法等極重最下の罪人も一たび南無と唱ふれば引接さだめて疑はず

一日二日の真心に彌陀の御名をし唱ふれば大悲の誓あやまたず九品蓮臺さだまれり

と云へる二首の如き、恐らくはかゝる十念具足の稱名に就いて詠つたものであらう。

### (B) 彌陀一佛(土)論

千觀は『極樂和讃』に阿彌陀佛の餘佛にすぐれて特に我等に縁深く、極樂の一切淨土にすぐれて特に契り厚きことを述べ、更に『十願發心記』に於いてその各々の理由に就き、二義或は三義を擧げて詳細に之れを論證してゐる。<sup>(15)</sup> (三)(A)

の作者考(條下参照)。これは一見何でもないやうなことであるが、日本淨土教史上注目し値すべき事柄である。思ふに、叡山に

於いては彼以前にも多くの淨土願生者が輩出してゐる。慈覺にしても智證にしても、すべて心を彌陀一佛に傾けた人ばかりである。然し彼等の信仰は極めて漠然たるもので、何故に彌陀一佛を歸命するのか、また何故に極樂一國を願生するのか、さう云つた理由に就いては何等言及してゐないのである。かゝる時代に當つて千觀が、阿彌陀佛及び其淨土の我等衆生に對する因縁の深厚性を論及したと云ふことは、確に特大書さるべき問題である。

### (C) 安養都率優劣論

安養と都率の優劣論は遠く印度支那に濫觴してゐるのであるが、また我が日本に於いてもしばしば論證せられてゐるのである。近く源信の『往生要集』、珍海の『安養知足相對抄』の如きその代表的述作である。然しながら、寡聞なる私の知る限り、本邦歷史上その最初のもの、我が千觀の『十願發心記』であらうと思ふ。従つて、この意味に於いて

も本書は重要な意義を持つものであつて——たとひ、その論旨薄弱幼稚にして、獨創性に乏しいとしても——必ずや吾人の一顧を要すべきものであらうと思ふ。

さて千觀は熱烈なる西方願生者であつたから、勿論極樂優位説の方に左袒するものである。而してその論旨は大體かうである。都率には内院と外院とがあつて、内院は十善を持つて毀犯せざるものが往生するところ、外院は我々凡夫の往生を許すも退轉のあるところ。即ち一は聖者が往生して我々の及ばざるところであり、一は凡夫が往生するも退轉があつて、佛果を成就し得ざるところである。共にこれ我等の稀求するに足らざるところである。然るに彌陀の淨土には九品の蓮臺があつて、たとひ華開に遅疾があるにしても、すべてこれ退轉することのない世界である。就中、上中の二輩は善人、下輩の三品は惡人の往生するところである。されば我等如き極惡最下の凡夫も、必ずや此の下輩の淨土には往生して、不退轉に住して遂ひに佛果を成就することが出来るのである。要之、千觀の論旨は極樂は凡夫も往生して而も退轉せざるところであるから、この故に都率に比し優れたところであると云ふに盡きるのである。

而して千觀は更に『十疑論』の二義をあげて、右の自説の證權となしてゐる。一體都率は十善を受持するものも往生は不可能である。何となれば、『上生經』には諸の三昧を行じ正定に入つて初めて往生すと説き、更に方便引接のことを云はないからである。然るに極樂は已に衆生攝取の本願があつて、故に都率にすぎるところである(これ第一義)。また都率は已に欲界に屬し、五欲に着して退轉がある。然るに極樂は三界を超過して、かゝることがない。奇鳥の囀せうこれ法音、瑤池の聲これ解脫たるところである。故に都率にすぎること第二義。そして次に實例をかゝけて云ふ。無著、世親、師子覺の三人が都率の往生を期し、先に往くもの必ず還つてその狀況を報知せんと約束した。師子覺、世親の

二人先づ死し、三年經つて獨り世親のみ還つて來た。無着が汝何故に歸ること遅きやと尋ねると、世親は彼の土の日は非常に長いからと答へた。然らば師子覺は云何してゐるかと重問すると、師子覺は五欲を娛んで別に眷屬が出来たから、未だ一度も彌勒を見てゐないのであると答へた。以て都率の五欲があり、退轉のあることが知らるゝ。以上が『十疑論』の大略的梗概であるが、要之に千觀は天台に席をおくものであるから、依つて以て之を自説の證權としたものであらう。

### (D) 極樂報應論

極樂報應の問題に對して千觀は如何に見解してゐたか。『十願發心記』には之を次の如く論じてゐる。

諸佛土不<sup>レ</sup>過<sup>ニ</sup>四種<sup>一</sup>。一、同居土、謂<sup>ク</sup>未<sup>レ</sup>離<sup>ニ</sup>三界<sup>一</sup>染<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>凡夫之所居也。此土凡夫聖人同居。故名<sup>ニ</sup>同居<sup>一</sup>。此有<sup>ニ</sup>二種<sup>一</sup>、一、同居淨土、如<sup>シ</sup>極樂界<sup>一</sup>也。二、同居穢土如<sup>シ</sup>娑婆界<sup>一</sup>也。二、有餘土、謂<sup>ク</sup>三種意生身及永滅<sup>ニ</sup>二乘人所居也。雖<sup>モ</sup>無<sup>シ</sup>煩惱之餘<sup>一</sup>、又有<sup>ニ</sup>所知障之餘<sup>一</sup>、故名<sup>ニ</sup>有餘<sup>一</sup>。三、實報土、謂<sup>ク</sup>地住已上諸大菩薩之所居也。依<sup>テ</sup>六度萬行、諸功德、因<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>自他無碍、眞實果報<sup>一</sup>、故名<sup>ニ</sup>實報<sup>一</sup>。四、寂光土、即<sup>チ</sup>是唯佛一人所居。二障悉寂、智光圓照、故名<sup>ニ</sup>寂光<sup>一</sup>。

これに依ると、凡聖同居土、方便有餘土、實報無障礙土、常寂光土等四種佛土の中、第一の凡聖同居の淨土を以て極樂に對配せしめてゐるのである。これは勿論天台教義一般の通念であつて、別に事新しいことではない。しかし千觀の如き熱烈極まる淨土教者にして、なほ後世法然・親鸞の、その如き純正淨土教との間に、その隔りの遠きものあることを見逃し得ないのである。以て當時平安期に於ける淨土教が如何なる程度のものであつたかを略ぼ忖度し得るであらう。

以上千觀敎學の概略を論じ終つたことであるが、最後に結論としてそれが後世への影響に就いて一言せねばならぬ大體上にも一言せる如く、千觀の淨土敎は一般大衆を相手とし、平易簡單を旨としたものであるから、これが民衆に及ぼした影響は實に想像以上のものがあつたのである。特に彼の『極樂讚』の如き、已に『極樂記』(平安朝)や『古今著聞集』(鎌倉)が指摘してゐる如く、平安鎌倉の二期にかけて、民衆の口實<sup>くちじ</sup>むところとなり、これに依つて極樂に結縁せるものはその數を知らざる有様である。また之れを文學的に眺めて見ても、和讃文學の先驅をなし、一例を云ふと『淨業和讃』の如き、全く之れを資材として成れるものである<sup>(16)</sup>。

更に『十願發心記』に就いても、『今昔物語集』等には「十の願を發して衆生を利益せむが故也」とあり、民衆への勸化力は絶大であつたらしい。而も禪瑜の『二十往生大願』、源信の『十大願』、覺蓮の『十願發心記』、覺愉の『十誓願』の如き、すべてその書名から眺めても、明かに此の『十願發心記』を資材とし、或は此れに準じて草せられたものと想像せらるゝのである。尤も、これ等のことに就いては、稿を改め他日の研究を期せねばならない。

(昭和十四・三・二十七稿了)

註 ① 坂本探訪第一回の研究報告としては「宇治大納言源隆國の安養集に就いて」を本誌(十九・三)上に發表した。

② 『本朝高僧傳』に「永觀元年臘月某日、手握願文一口唱寶號、怡然蟬脫、壽六十六」とあり、また『扶桑隱逸傳』にも「永觀元年十二月寂す、年六十六」とあつて、この永觀元年より逆算すると延喜十八年が千觀誕生の年時となる。然るに『扶桑略記』には「私曰、此内供之往生、年來未詳、可考」と云ひ、次いで故老の説として永觀二年八月十五日夜六十六歳を以て示寂『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土敎

したことを述べてゐる。然らば、これより逆算する時、彼の誕生は延喜十九年となる。

③ 註②を参照。

④ 千觀の傳記を述ぶるものに就いては左の如き十四部の書がある。

- ① 日本往生極樂記 (佛全一〇七 p. 10 a)
- ② 今昔物語集 (國史大系十七 p. 269)
- ③ 扶桑略記 (國史大系六 p. 733, 751)
- ④ 發心集 (佛全一四七 p. 165 a)
- ⑤ 古事談 (國史大系十五 p. 75)
- ⑥ 古今著聞集 (國史大系十五 p. 190)
- ⑦ 元享釋書 (佛全一〇一 p. 56 b)
- ⑧ 寺門傳記補錄 (佛全一二七 p. 242)
- ⑨ 三國傳記 (佛全一四八 p. 311)
- ⑩ 扶桑隱逸傳 (p. 11 b)
- ⑪ 東國高僧傳 (佛全一〇四 p. 67 b)
- ⑫ 扶桑寄歸往生傳 (佛全一〇七 p. 138 a)
- ⑬ 本朝高僧傳 (佛全一〇二 p. 157 b)
- ⑭ 天台霞標 (佛全一二五 p. 190 a)

⑮ 本書は匡房の『續本朝往生傳』に「寛和年中、著作郎廣保胤、作『往生記』傳『於世』とあるより見ると、寛和年中(一六四五—一六四六)、即ち千觀の寂後三年乃至四年目の述作なることが知らるゝ。以て千觀傳に就いては權威あるものなることが想察せらるゝであらう。

⑥ 本書の作者に就いては異論があるが、私は隆國説を支持するものである。詳しくは拙稿「宇治大納言源隆國の安養集に就いて」(本誌十九・三)参照。

⑦ 千觀の「四弘誓願の歌」は左の如くである。

衆生無邊誓願度

いり日さすかたへぞいそぐおもへども

われもう見にていかじすくはむ

煩惱無邊誓願斷

むかしよりこゝろのくまに在るちりを

たてゝぞきよき風にまかする

法門無盡誓願知

つきもせぬ法の雨にはみなぬれむ

ほとけのたねをあらはさむまで

無上菩提誓願證

山の端にかくれし月をもとめても、

わが身のためとおもふものかは

⑧ 近くは山口光圓教授の「叡山の淨土教」(『宗學研究』第十二號)参照。

⑨ 私の發見にかゝる『十願發心記』が千觀の述作として間違ひなきことは、それが良慶の『安養抄』(大正八四頁、178頁)所引の『十大願記』(十願發心記のこと)、及び良忠の『要集記』(淨金十五頁、230頁)所引の『十大願』等の引文と全く合致することに依つて知らるゝ。

⑩ 珍海の『菩提心集』(淨金十五頁、30頁)に「和讃とて日本詞を本として作れるもあり。其讃云」と云ひて引用せる和讃は勿論『十願發心記』に見らるゝ千觀内供の淨土教

千觀の『極樂讚』を指すのであるが、已にこれなども左に對照して明かなる如く、語句に相異を見ることが出来るのである。

娑婆の界の西の方 十萬億の國すぎて 淨土はありつ、極樂

界 佛はゐます彌陀尊

娑婆世界の西の方 十萬億の國すぎて 淨土あるなり、極樂  
界 佛在ます彌陀尊

(現存の『極樂讚』)

(『菩提心集』所引の『極樂讚』)

⑪ 山口光國教授「叡山の淨土教」(『宗學研究』第十二號)中に、その全文が寫眞にて載つてゐる。

⑫ 拙稿「宇治大納言源隆國の安養集に就いて」參照。

⑬ 文玄と云ふ年號は見當らない、恐らくは寫誤に屬するものであらう。賴珍は延元(一九九六—一九九八)頃には存生してゐた人物であるから、これに前後する文の字の附いた年號を見ると「文永」「文保」「文和」「文中」等がある。此等の中の一つを指示してゐるものにあらざるか。

⑭ この千觀の「十念論」は義寂の『無量壽經述義記』のそれに負ふところが多い。義寂の疏は現存しないが、私の知る限り古きところでは、慈惠の『九品往生義』、千觀の『十願發心記』、源信の『往生要集』、隆國の『安養集』、良慶の『安養抄』等に引用せられてゐる。その後の鎌倉及びそれ以後に至つては枚舉するに違がない。

⑮ 『十疑論』第七疑(淨全六 p. 311 以下)參照。

⑯ 詳しくは多屋教授『和讃史概説』を參照。